

# 松島浄先生と私

望月重信

松島先生が明治学院を退職なさる。寂しい限りである。松島先生と私は先輩と後輩という間柄である。松島先生の専門は文化社会学、文学社会学、そして文藝批評、私は教育社会学、言語社会学、子ども社会学である。専門領域からいえば相違があるかもしれないが深層において通底する「共通文化項目」があると思っっている。その典拠は吉本隆明にある。

共通の文化項目といっても吉本隆明を実に松島先生は深く読みこなしている。詩論、政治と文学、『マス・イメージ論』を文化社会学にたぐりよせて独自の論を展開する。また、「恋愛論」は少しも「媚びて」いないで読者に解釈の多義性を委ねているのである。『自立の思想的拠点』を一九六〇年代に読んだものとして私は実に松島先輩から多くを学んだと思う。

例えば松島先生と話をしていたとき、村瀬学の『初期心的現象の世界』と『理解おくれの本質』を紹介してくださった。「病理」論ではなく、「心的作用論」「関係論」である。

私たちはともに大学人であるが、吉本隆明は教育や学問がどうであるかといった制度的な意味での大学にほとんど興味がないことを知っている。松島先生はこの吉本の「信念」を敢えて大学人の真骨頂の糧にしている「ふ

し」がある。最近、吉本は次のようなことを言っている。「団塊の世代の人たちが六〇年代後半に青春時代を迎え、何かに突き動かされるようにとった無意識の行動にも思想的な意味があり、それをどう、いまに繋げて考えればいいのかということが課題として残ると思います」（「天皇制・共産党・戦後民主主義」、『中央公論』、二〇〇九年一〇月号）。

明治学院を一九六〇年代初めに過ごされた松島先生がその後一〇余年の学生（七五年度生）とともに研究会を開催したことはなにか深い縁がある。私が明治学院に奉職して学生が「見えて」きた年度であった。ポスト・パーソニアンを生きた。翻訳以前にもうP・バーガー、ラックマン、シュッツを読み、論じあつたことは記憶に新しい（研究会の成果は日本社会学会で共同発表）。

そして、松島先生と共著『ことばの社会学』（世界思想社、一九八二）を出版したことは私にとって意義深いものであった。松島先生はその著の「あとがき」でこう述べている。「人間はわからない、という疑問をつねに持っていたいものである」。

松島先生がフロイトの文化論の方法について、フロイトが「虚偽意識の合理化に対する鋭い批判を向けていた」点に注目していたことで、私は「凄い」と思ったものである。教育学を専門とする私が「合理性」「効率性」を意識する自分にある種「苛立ち」と「生き急ぎ」をもっていたのを恐らく松島先生は察知していたのではないか。

松島先生が科学研究費（旧文部省）を取られて「北九州文化の変容に関する実証的研究」（正確なタイトルではないと思うが）をすすめるなかで、「北九州の子どもたち」について研究分担者として声をかけてくださり、さまざまな勉強の機会を与えてくださったことも懐かしい思い出である。そのフィールドワークをおして北九

州の風土と文学、文化そして「北九州」の「かわすじ気質」を松島先生から伺うことができたことと「中央」と「地方」「地域」そして「県民性」について話しあったことを鮮やかに覚えている。

一九六四年卒の松島先生、六六年卒の私。きつと松島先生も当時の明治学院の心象風景を抱きながら大学人を過ごされたと思う。へボン館のない白金の丘、校門からまっすぐ登って左にひっそりと建つ小さな図書館、その隣の二〇〇番台教室、その斜めまえの中庭を挟んでグリーンホール、その二階での授業、地下の部室棟、そして一〇〇番教室、六〇〇番台教室、ベールシバ。

いまでも「旧きよき六〇年代」としよう。その数年後、確かにその社会的状況は政治的季節であって、「遅れてきた全共闘」はキャンパス狭しとばかりに「闊歩」した。松島先生はその政治的状況を多くは語らない。

新明正道先生の社会学史講義、館逸雄先生の社会心理学・社会哲学、三浦恵次先生の広報学・コミュニケーション論、後藤和彦先生の放送制作論、小山栄三先生の新聞社会学等々。諸先生の授業には独特の方法視座があり、学部時代、松島先生、私は明治学院の社会学の気風を受けてきたと勝手に考えている。その私の勝手が先生と私を深層に繋げているものだといまあらためて確認しているのである。

大学人として学部所属が違うこともあり、そのことが私の松島先生へのあまえにもなっていたと思う。これからはその「あまえ」がだせない、お話を伺えない。「いや、どうも、じゃつ、また」という言葉だけで私が安心してしまふこともキャンパス内で、できなくなると思うと寂しいかぎりである。眼鏡の顔立ちにいつも微笑みがあり、しかしその奥のまなざしに迎合を許さない厳しきがある松島先生。そんな先輩に最後にエールを送りたい。これからも健康にお過ごし「文学社会学」を生き（絵を描き）続けてください。

松島浄先生と私

先生「じゃつ、また」。